

5章 目に見える「神のかたち」

～教会は「しもべ」の性質を持つ～

「神のかたち」が歪められる時、神の御計画は見え難くなった。

神の偉大な御計画は、「万物」を和解させることです。そして「万物」には私たちも含まれます。創造の第6日目に神はご自分に似せて人間を男と女とに造られた（創世記 1:26-27）と聖書に記されています。私たちは神に似せて造られたのです。神が私たちと和解したいと願われるのは当然です！

そして聖書は簡潔に、神は造られた全てのものをご覧になられ、それは「非常に良かった」と言われた、と記しています（創世記 1:31）。私の想像の中では、神は被造物の各部分を注意深くご覧になり、満足した表情で笑顔を浮かべてうなずいておられます。日の光がある。よし。木々がある。よし。月がある。よし。蝶々が飛んでいる。よし。神はその被造物を喜んでおられます。最後に神は、ご自分に似せて造った最高傑作としての人間をご覧になり、「非常に良い！」と感嘆の声を上げます！「私の姿を身に帯びている。彼らは私自身を現している！」

人間は特別でした。神ご自身がその原型であり、モデルでした。他の被造物も神の栄光を現してはいましたが、神ご自身をそれほどまでに豊かに現していたのは人類だけでした！私はしばしば、神の似姿を身に帯びている人間は被造物の「王冠」と表現します。「王冠」という言葉には、「頂点、高くそびえ、壮大な何かの最も高い部分」という意味もあります。創世記を読むと、人類の創造が、神の創造の御業すべてにおける最高傑作であったことが分かります。また王冠は主権と権威の象徴でもあります。国が王または王妃に王冠を授けるとき、その人物は国の最高指導者であると指名されたことを意味します。事実、神は人類に被造物の指導権一地を従え、命あるものを支配し、広範囲にわたる全被造物全体の管理者となること一を与えておられます。

神の似姿に造られたので、他の被造物には見られない次のような神の属性が人類には与えられています。

- 創造性：新しいものを作り出す能力
- 言語：ことばを用いて、考えや概念を伝達する能力
- 関係：人・自然・働きと向き合い、意図的に目的ある相互関係を作り出す能力
- 道徳的選択力：「建設的」か「破壊的」かを判別する能力、美を識別する能力

- 「しもべ」能力：他者に対して無私の心で同情・愛を注ぐ能力

神の属性のこれらの側面は、しばしば他の被造物にも見出すことが出来ます。しかし動物の世界と人間とではそれらの現れ方に大きな隔たりがあります。サルには創造性がありますが、彼らには自転車、自動車、宇宙ステーションを作り出す能力はありません。狼は互いに意思を伝達しますが、子孫のために歴史記録を残すことはしません。

私はここで、神の属性として「愛」を取り上げませんでした。「神は愛です。」と聖書には記してあります（ヨハネ 4:16）。「愛」は上に挙げた性質すべてを貫いているものだからです。事実、神に関することすべては「愛」であると言えます。ですから神の似姿を反映する行為こそ「愛」と呼べるものなのです。使徒ヨハネは、「愛する」と言っているながら必要を抱えた兄弟に仕えない者のうちに、どうして神の愛が留まっていることがあるだろうか、と言っています（Iヨハネ 3:17）。憐みと自己犠牲を伴うしもべの姿こそが、神のご性質が人の内側に現れていることの最も重要なしるしなのです。このようなしもべの姿を失うなら、他の属性のすべては墮落し、歪められる可能性があります。

- 創造性は、核兵器をも作り出すこともできます。
- 言語能力は、ポルノを作ることにも用いられます。
- 関係は、独裁体制を作り出すこともあります。
- 「道徳的選択」は、民族虐殺や墮胎を正当化するために使われることもあります。

人の内にある「神の似姿」としての「しもべ」の姿を顕著に示すものは、弱い者たちに対する同情心と自分を犠牲にしてこの人々に仕えるということです。自然界でも、動物が自分を犠牲にするということがあります。例えば、母鳥は火事の際に本能的に自分を犠牲にしてひよこを守ります。しかし、神の犠牲は意識的です。キリストは私たちが癒すために、私たちの苦悩や嘆きと同化する道を選ばれました。意識的に私たちと同じ姿をとり、犠牲を払って私たちの必要の只中に来てくださった神の姿こそが、憐れみに満ちた奉仕の定義です。動物の世界においては、犠牲を払うということは本能的なものです。それに対し神の場合は、憐れみから来る意図的な選択として犠牲を払われたのです。そして神はこの比類ない「しもべ」の姿を私たちの内に与えられたのです。

創造の御業の後ほどなくして、人の内にある「神の似姿」は歪められてしまいました。皮肉なことに、神のようになりたいと願った人間の罪深い試みが、実際には人間の内に与えられた「神のかたち」を歪めてしまったのです！ 旧約聖書の時代には、特に「愛と犠牲をもって仕える」という「神のかたち」を自分の内に宿すことの意味を理解することができませんでした。神が意図されたことは、神によって与えられたこの「仕える」という属性を用いて人が他者や被造物に仕えるということでした。しかし、人は自己中心的に行

動しました。人間は神から与えられた属性をいつも自分のためだけに使い、自分のやりたい放題を行うようになってしまったのです。人間は「神の似姿」を歪め、その歪みは歴史を通して受け継がれました。数千年の後、使徒パウロはこのことを確証しています。パウロは、人間が創造主を礼拝する代わりに自分自身と造られた物を拝み、数多くの災いをその身に招いたと書いています（ローマ 1:24-30）。

- 性的無分別
- 悪と貪欲に満たされた墮落した精神
- ねたみ、殺意、争い、欺き、敵意、陰口、中傷
- 神を憎む、人を侮る、傲慢、大言壮語、悪事の企て、親に逆らうこと
- 無知、不誠実、無情、無慈悲
- このようなことを、人間の一般的あり方として是認する

「神のかたち」は歪められ、神の御計画は見え難くなってしまいました。しかし、神は被造物を深く愛しておられますので、人間の内にある「神のかたち」が歪められてしまったとしても、ご自身の御計画を台無しになさるようなことはなさいませんでした！ノアの洪水、バベルの塔、律法、バビロン捕囚など旧約聖書の記述を見ても、神が、人間の自己中心的な選択から、ご自身の御計画を守っておられる様子を見ることができます。

新約聖書においても、イエス様の受肉と、教会の誕生のうちに神の大きな御計画を見ることができます。

「神のかたち」は、イエス様の「しもべ」としてのあり方に啓示されています

イエス様が地上に来て下さって以来、人はイエス様を見ることによって、神がどのようなお方を理解できるようになりました。イエス様は人間の形をとった完全で欠けのない神の姿そのものでした。イエス様は正確に神を現していました（ヘブル 1:3）。私たちは、イエス様を見ることによって、神がどのようなお方であるかということだけではなく、神が意図された人間本来の姿がどのようなものであるかを見ることができるのです。イエス様は、「神に似せて造られる」という事が何を意味するかということの、完全な模範となりました。イエス様を見るとき、私たちはそこに「神のかたち」—創造の王冠—を見ているのです。

私たちがイエス様を見るとき、「神のかたち」の最も重要な属性～王冠に埋め込まれた最も光り輝く宝石～を見ることができます。イエス様のうちに見られるその光り輝く特徴とは、大工としての持久力や筋力の強さではありません。またパリサイ人たちを凌駕したイエス様の知恵でもありません。また完全な霊性でもなければ、身分の低い人々から慕われ、

高ぶったものたちを黙らせたその人間関係の巧さでもありません。それらを合わせたものですらありません。王冠の最も光り輝くその宝石は、イエス様の「しもべ」としての属性です。

ヤコブとヨハネの母の質問に答えられたとき、イエス様はご自身の「しもべ」としての属性に言及されました。彼女は、自分の二人の息子をイエス様の王座の左右に座らせて下さるよう願いました。イエス様は彼女に、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。(マルコ 10:45)」と言われました。パウロはローマ人に宛てた手紙の中で、キリストの「しもべ」としての姿を確証しています。「私は言います。キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者のしもべとなりました。(ローマ 15:8)」

最後に、イエス様の「しもべ」性に関してパウロが最も力強く書いている箇所を考慮してみましょう。

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。
(ピリピ 2:6-7)

その次の節で、しもべの姿をとられたイエス様に対する神の応答をみることができます。

それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリピ 2:9-11)

イエス様が自発的に、犠牲を払ってしもべになられたので、神はイエス様を高く上げられました。神はイエス様に与えうる最高の位をお与えになり、全ての名にまさる名をお与えになりました。全ての舌が、この「しもべ」であるお方こそが主であると告白するので、イエス様は他のどのような存在にもまさって高く上げられました。神は、ご自身の創造における御心を完全に現したために、イエス様をこのように高く上げられたのです。イエス様は神の似姿の最高の実例として、自発的で犠牲を伴う「しもべ」の姿をあますところなく表現されました。神は「しもべ」であられます。そしてイエス様は神の「しもべ」性を示す模範です。

人間は創造の王冠、「しもべ」の姿は王冠に埋め込まれた「宝石」のようなものです。イエス様が「しもべ」としての役割に徹したゆえに賛美の対象となることによって神は栄光を受けられます。同じように、神の子どもたちが「仕える」ことによって神のかたちを現すとき、神は栄光をお受けになられます。イエス様は弟子たちにこういわれました。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ 5:16)」

聖書は、「しもべ」になって仕えることは高貴な召しであると言っています。

- 神は、貧しい人々や虐げられた人々への奉仕を喜ばれると言われた (イザヤ 58 章)。
- イエス様は弟子たちに、仕えることこそ神の国の民であるかどうかを判別するしるしである (神の国の民は、飢えている者にパンを与え、裸の者に着せ、病人や牢にいる者を訪ねる) と言われた (マタイ 25 章)。
- 聖くけがれのない宗教は、やもめや孤児 (助けを必要とする声なき人々) の世話をする (ヤコブ 1:27)。
- イエス様は、私たちが隣人を愛し、仕えることこそ大切であることを強調された (マタイ 22:39)。

神はご自身の民が、御子の姿に似たものなることを願っておられます (エペソ 4:13)。「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(Ⅱコリント 3:18)」と述べられているように神の民は徐々に御子の姿に似たものに変えられていくのです。聖霊が私たちの内に生き、私たちがキリストの似姿に造りかえてくださるのです。そして私たちはキリストの最高のご性質「しもべ」の姿を生きる者とされていくのです。

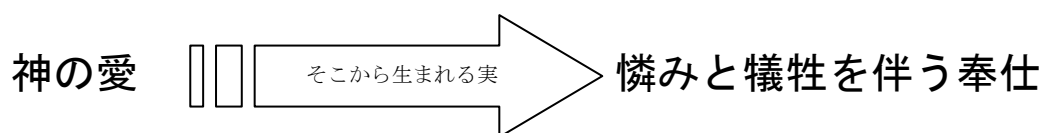
「神のかたち」は、教会の仕える姿を通して現される。

キリストを通してご自身を現された神は、次に、ご自分の姿を教会の内に現わされました。教会の役割のひとつは、神の似姿、特に「しもべ」としての神の御性質を帯びる人々を生み出し、キリストの弟子とすることです。神の御心は、信仰者の共同体を用いてご自身の御計画を明らかにし、遂行することです。地域教会は新しい信仰者を生み出し、整え、その人々を「しもべ」となって人々に仕える大使として世界に遣わすのです。

神はただ理由もなしに、深い憐みを持ち、犠牲を伴う奉仕に生きるようにと命じられたものではありません。そのように私たちが生きることによって、神の最も偉大な属性である愛がこの世に現されるからこそ、命じられたのです。イエス様は私たちに、神を愛し、自分自身を愛するように隣人を愛せよ、と言われました。自分にして欲しいように隣人に愛

をもって接することによって、私たちは神への愛を表現するのです。キリストが憐み深く被造物に仕えてくださることによって世界に対する神の愛が表現されたのと同じです。今の世界においても、神のご性質を余すところなく世界に現す方法は、キリスト者が犠牲的に人々に仕えることによるのです。言葉だけではなく、犠牲を払って人々に仕える行動をするとき、その人を通して神の愛が明らかにされるのです。

神の愛に動機づけられた行動の実は、憐みと犠牲を伴う奉仕です。愛の奉仕は破れを修復し、再建し、贖います。これが地を癒す神の御計画です。この神のご計画が成就することによって、神は栄光をお受けになるのです。



1999年、11月にエチオピアの首都アジスアベバにおいて実際に起こったことをご紹介します。同年8月に、アジスアベバでカンファレンスを開催したとき私はギザチュウという20歳の若者を紹介されました。彼は貧しいクリスチャン家庭の10人兄弟の一員として成長しました。ギザチュウは何人かの友達（自分と同じように貧困家庭に生まれた）と共に、路上生活をしている数多くの10代の少年たちのことに心を痛めるようになりました。彼らは時折山に登っては、そのような少年たちを助けるためにどうしたら良いのか祈り、神の御心を求めました。彼らが始めたことは、路上生活をする22人の少年たちのために、聖書研究会、食べ物、シャワーやトイレ、古着などを提供することでした。

カンファレンスの後、ギザチュウと彼の友人達は、彼らがこれまで取り組んできたその他のボランティア活動について興奮気味に話してくれました。彼らはこの本に紹介する教えを体系的に学び、実行に移していました。ギザチュウたちのグループは、首都の中心にある繁華街で、交通量の多い橋の周りを清掃することを計画しました。路上生活の少年たちにも一緒にやろうと声をかけました。彼らは朝の6時に集合し、2つのグループに分かれました。ひとつ目のグループは通りの方からゴミを拾っていきました。様々なものが混ざったゴミは悪臭を放っていましたが、彼らは続けました。もう一方のグループは祈りながら救急医療活動を行い、何をしているのかと聞かれたときには、イエス様の証をするようにしました。朝の9時に、ひとつ目のグループはゴミ捨て場にゴミを捨てに行きました。拾ったゴミをゴミ箱として使われている大きなコンテナに捨てるときに、彼らはその中のぞいて見ました。すると人間の足のようなものがそこにあっただのです！ゴミをよけると、若い男性が横たわっていたのです。彼はゴミ箱を住处にしていたのです。その男性の鼓動を聞き、まだ生きていのかどうかを確かめました。彼はほとんど口を動かすことも出来ない状態で、意識も朦朧としていました。注意深くそのゴミ箱から彼を引き出し、着ていた

汚いぼろ布を脱がせました。汗と汚れで、その布は彼の身体に貼り付いていました。彼は数年間その布を脱いだことがなく、水浴びもしたことがなかったため、彼の身体は腐敗臭を放っていました。(後で聞いてわかったことですが、先日寝ている時に上から投げ込まれた熱い石炭で火傷を負い、そこに布の一部が付着してしまったとのことでした)。ギザチュウと仲間たちはその部分の布を切り取り、近くにあった公共のシャワーで彼の身体を洗い、散髪しました。後でシラミの苦痛をなくすために彼の頭を剃る必要がありました。そうしながら、彼らはその男性とコミュニケーションを図ろうとしましたが、何の応答もありませんでした。

しばらくしてから、彼は何かを話し始めましたが、まるで赤ん坊のような話し方でした。注意深く耳を傾けると、話の内容が少し分かってきました。名前はジャメル、街から 200 キロ離れた場所で生まれ、両親はイスラム教徒とのこと。何年も前に、彼はより良い生活を求めて街までやってきました。街に行きさえすれば必要なものは全て手に入るだろうと考えたとのことでした。しかしそこには食べ物も、住む場所も、着るものもなく、彼が見つけたものは、捨てられた 5 匹の犬だけ。何年もの間放浪を続け、最終的に彼はゴミ箱の中で生活することを決め、ゴミ箱が自分の家のように感じたので希望を持たずそうです。捨てられたゴミを食べ、犬と一緒に暮らし、誰も彼のことなど気に止めないので誰とも関係を持ちたいとは思わなくなっていました。ギザチュウたちのボランティアグループが愛と憐みの態度で彼に仕えるまで、誰一人彼に話しかける人はいませんでした。そして彼らは、イエス様の愛について話すことができたのです。

男性は彼らに聞きました。「私を気にかけて、愛してくれる神がいるのか?」「そうです!」はっきりとした答えを聞いて、この男性は戸惑うこともなくキリストを受け入れたのです。

このボランティアたちがしていることを目に止めていたひとりの女性が尋ねました。「何故あなたたちはこんな人に献身的に仕えるようなことをしているのですか?」クリスチャンたちは答えました。「イエス様が人々を愛しているということを現すためです。」

ジャメルは病院に連れて行かれ、健康診断と治療を受けました。数ヶ月の後、彼は健康を取り戻しつつあり、彼を診断した精神科医は、彼は良くなるだろうと言いました。彼は身体を洗い自分で衣服を洗濯するようになり、食べ物を食べ、人々と付き合うようになり、教会に毎週出席するようになったとのことでした。

あのカンファレンスから 2 年後、私は再びアジスアベバでの訓練会に招かれました。その際に、ゴミ箱で見つかったその若い男性に直接会うという特権に与ったのです。彼は、かつてイエス様に出合ったある男のように、「服を着て、正気に返って」(マルコ 5:15) い

ました！

このクリスチャンたちは、「しもべ」になって仕えたのです。キリストのご性質を身にまとい、キリストが生きられたように生きたのです。彼らは神の目を通してジャメルを見、そしてジャメルもまた神の似姿に造られているので、創造性、言語能力、関係を築く能力、道徳の選択、仕える性質を与えられているということを理解していたのだと信じています。彼らがジャメルに初めて会った時、創造性も、言語能力も、関係を築く能力もほとんどジャメルからは失われていました。道徳規範や仕える心があつたかどうかは不明です。彼にとって愛は何の意味もなさないものでした。その状態から、少しずつ、少しずつ、ジャメルの中に神のご性質が見えるようになってきました。

イエス様がラザロをよみがえらせたとき、ラザロの友人たちに埋葬用の布を取り除くように命じました。(ヨハネ 11:44) 神はジャメルの身体的、霊的生命を保っておられました。ギザチュウと彼の友達は、文字通り、ジャメルの埋葬用の布を取り除いたのです！

私たちは、聖書的に「仕える」ことに召されている

多くのクリスチャンたち、特に長きにわたり経済的、政治的不正や権力の乱用を見てきた人々にとっては、仕えるという概念は不快なものでしょう。仕えるとは強制的な奉仕あるいは奴隸的従属という意味合いを持つからです。その結果、仕えるということを軽蔑してしまうのです。

自発的でない奉仕や労働は、様々な形をとって現れます。奴隸という形をとったり、経済的必要からお金を稼ぐことだけが目的の品位を貶めるような労働であったりします。また精神的、社会的、政治的により力をもった誰かによって、望まない奉仕や労働を強いられることとして現れます。これらはどれも、聖書が語る「しもべ」の姿ではありません。教会の役割は、聖書が意味する本来の「しもべ」の姿に、人々を連れ戻すことです。

もし私たちが、聖書が意味する「しもべ」として生きることを経験したことがないのなら、まず私たちから変えられる必要があります。クリスチャン生活を長い道のりを行く旅のようなものと考えましょう。私たちが罪を犯すとき、その道は、間違った方へ分岐することになります。私たちはイエス様の「行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。(ヨハネ 8:11)」という言葉聞き、向きを変え、方向を変えて歩き出すのです。方向を変えた後、もとの道の同じ場所に行き着き、そこに留まるのでしょうか？違います。私たちは新しい方向、神が望まれる義の方向に向かって歩き始めるのです。

使徒パウロは、信者に対し、新しい人を身にまとい、神に似たものとなるように励ましています。これまで嘘をついていた者が真実を語る者となり、泥棒は与える者となり、人を不快にさせる話をしてきた者が、人を励まし建て上げる者になり、苦々しい思いに満たされていた者は赦す者になるのです（エペソ 4:24-29）。これまで自分の利益を考えて行動していた者が、向きを変えて神の望まれる義の方向へ他者の利益のために仕えるようになることへに歩き出すのです。

聖書が示している「しもべ」の姿になることは、内に住んでくださるキリストの助けなしには不可能です。しかし、聖霊の力によるならば、それは可能なのです。パウロは読者に、神の目的を達成するために神と人々は共に働くのだということを忘れないように記しています。

恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。ピリピ 2:12-13

使徒の働き 9 章には、アイネアという中風の人が癒され、死んでいたドルカスが生き返ったことが記されています。これらの癒しを行ったのがイエス様ではなくペテロであるという事実は、起こった出来事と同じぐらい劇的です。神はご自分を信じる弟子たちの内にある「神のかたち」を通してご自分の姿を現すことを願っておられるのです。私たちが人々に神の愛を表すなら、神は私たちを用いて、人を変革する力をもっておられるご自分の姿を現してくださるのです。かつては罪によって破壊されていた私たちであっても、今は「神の似姿に造りかえられた人生」という奇跡を世界に証し、伝え続けることが可能とされたのです。全宇宙の主であり、私たちの「市長」であるお方が、ご自身とその愛のご性質、そして「しもべ」としての姿を現すために、ご自分の「市民」を用いられるというのです。いったい誰が、このようなことを想像できたでしょうか？神はすべてのものをご自身と和解させたいと願っておられます。万物を癒される神の御計画の中で、神の似姿を受肉している教会は大切な役割を担っています。神の似姿が教会とその人々によって現されることこそ、神の御心であり、偉大な遺産です。そしてまた、大きな挑戦でもあります！

私たちが「神のかたち」に造られている事実に向け、
以下の言葉に耳を傾けてみましょう！

「神の義」は、神の愛の本質を表現しているものです。神は正義を愛し、圧制を憎まれます。神は貧しい人々、在留外国人、やもめ、孤児を守るために戦われるお方です。神は飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、病人を癒し、失われた者を尋ね求めるお方です。神は人類すべてが救われ、ひとり子イエス・キリストにある真理を見出すように願っておられます。聖書に記されている神の姿を理解することは、社会に対する私たちの態度に深い影響を与えます。なぜなら、神が関心を示されることは、必然的に神の民の関心でもあるからです。ですから私たちも男も女も神に似せて造られたものとして尊敬し、正義を求め、不正を憎み、必要のある人々に仕え、働くことの崇高さを守り、休むことの必要性を理解し、結婚の神聖さを保ち、イエス・キリストの栄光を熱望し、全てのひざが彼の前にかがみ、全ての舌が彼の名を主と告白することを願うのです。それは何故でしょうか？これらすべてが、神が関心を寄せておられることだからです。

(ストットの著作からの引用)